The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	松山博士を追懐す
Author(s)	高瀨, 武次郎
Citation	懐徳. 1927, 6, p. 9-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88735
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

失策を思ひ出し、家内にも再三その談をしたが、今松山君についての憶出を綴ると、時節も丁度夏のことゝて、一番にこの出來事が胸に浮んで來る。

（八月二十日）

松山博士を追懷す

高瀨武次郎

松山博士が東京帝國大學文科大學の漢學科を卒業されたのは明治三十年七月であつた、私は其の翌三十一年の七月に卒業したのであるから、大學に在つては唯二箇年間共に學んだのみであつて、同教室に於て先師島田篁村先生の講義を聽いたことも大分あつたが、大學以前にも京都の第三高等中學校在學中にも同學校には居つたけれども、餘り親しくは知りませんでした。博士の漢學科の同年生は赤沼金藏、白川鯉洋、多城萬助、上田景二等の諸君であつて人數は少なかつた。私の入學した年には偶然にも十三名と云ふ多數の漢學專攻者がありまして島田先生も初對面の時に今年は大變多いと曰はれた程であつた、此時は遼東半島を取つた頃で漢學氣分が漲つた勢であらうと云ふ者もあつた、赤沼金藏中尉は話をすれば必らず遼東半島占領の功名談が出るので赤沼君を綽名して遼東半島と謂つて白川

君や博士も與して居つたことを追憶します、私が博士と能く知り合つたのは大學在學中であるが、其後ち私が大學を卒業した年即ち明治三十一年の夏に篁村先生は易簀されましたが、引續き島田家に於ては先生の遺稿を整理されることの計畫がありました、其時は孝子島田鈞一君を始とし、安井小太郎、服部宇之吉、狩野直喜、松山直藏四氏に私も席末に列して、毎日曜日の午前十時頃から午后三時頃まで小石川區の小日向臺町島田家雙桂精舍に集會して先生の遺稿の編纂に從ひ、約一年餘も繼續したと記憶します、其遺稿は家に藏せられ、漢文の分は數年前島田家から刊行され篁村先生遺稿と曰ふ、此一年許の間には私は博士と極て親しく知り合ひました。

又明治三十年前後から四十年前後まで東京に研經會と曰ふ經學を研究する會があつて毎月一回集會して居つた。博士も私も同じく會員でありました、猶此會の外に松山氏の宅のみで開いた研究會もありました、其頃は博士は浪人で時間が多くあつて頻りに讀書して居り、研究心は最も旺盛であつたらしく、家は小石川區の砲兵工廠の西の方、江戸川の屈曲した部分の北側の邊に在る生垣の家であつた、其時には御母堂も令妹も、令弟小卷潔君も同居されてあつた。御母堂は五十前後の人と見ゐた、嚴君の寫眞が掛けられてあつた樣に記憶する。其頃には博士は讀書の時間は充分にあつたやうでしたが、收入の道は殆どなかつた、或時の話に今年は最早百圓も喰込んだと謂つて居られた。其頃の百圓はなか〳〵貴かつた、其後ち博士は間もなく就職された、此時の小研究會には博士と狩野直喜君、其他博

士と同年の卒業者で私も之に加つた、但し此會は種々な事情で永くは續かなかつたが、是れは博士一人の主唱の研究會であつたから如何に講學に熱心であつたかを卜知するに足る。

小卷潔君は博士の令弟であつて、極て酷似した兄弟で、體格も性質も其儘のやうであつた、同君は高等工業學校を卒業されたが、腦病で沒せられたと聞いて居ります、博士の御母堂は極て嚴格なる家庭教育を施された、博士が人並勝れて嚴格で行儀の正しいのは全く母上の躾に由ると思ふ、私は父君は全く知らぬが、母君は可なり能く知つて居りました、博士は非常な孝行者として親の命には絕對に服從されて孝養を勵まれたのであります。

博士の令姪に橋本慶治君と云ふ人がある、博士は何と思ふたか、慶治君を私の宅へ預かつて欲しいと云ふて、本郷區森川町一番地唐橋通の拙宅へ連れて來られた、同君は兵庫縣明石町の人で農學校を卒業して東京へ出た時の事であつて、十八九歲でもあつたらしい、怜悧なる好き少年で頗る勉强家でありました、其頃には私の宅には高知市の人で北村義正と云ふ學生も居た、米國へ往つたが其後の消息は知らぬ、又愚弟青木保も居つた、保は今東大工學部の敎授であります、慶治君は其後ち農商務省に出て隨分根氣能く勤勞し漸次昇進して高等官と爲つて今は盛んに活動して居る。博士は慶治君の今日あるを喜び私の世話に賴るかの如く常々感謝されて私は却つて痛み入つて居つたのです、序ですが、慶治君の父君は橋本市藏と云ひ、明石町に住せられ先年沒せられた、同君の母君は今御健在であります、

忘れもせぬが、去る頃博士の終焉に先だつ五六日前に、私が大阪の鳥潟病院に博士を見舞つた時には博士の令夫人と、慶治君の母君と令弟橋本燒君と博士の令息堯君とが看護されてあつた、大病で六拾日に近く病床に横つて居る博士は痛たさうに繃帶した手を伸ばし蒲團の片隅を上げて指し彼所に慶治の老母も來て居るとて紹介の勞を取られた、私は初て母君と面會しました、母君は叮嚀にも板の間に危座して御挨拶をされ、慶治君の世話になつたことから色々と述べられた、私は四五分間で病室を辭去しましたが、博士は非常に衰弱されて居たけれども、徐かに話されたから段々回復さるゝならんと思ひしに此面談が終に此の世の御別れとなりました。

却說、話は初に返りますが、博士が廣島の高等師範學校教授となられてから會談する機會は少かつたが、大正五年頃からは懷德堂に來られて屢面會しましたが別に記すべきこともなく講演の事や講學上の話であつた、學位論文提出の事は西村碩園博士の切なる勸告に從ふたものである事は博士の直話でした、論題は『宋代五子哲學』と云ふのであつた、三通の論文を鐵筆で認めたのは永野政德と云ふ老人で洛北下鴨に住んで居たが今は既に彼世の人となつた、論文提出後の博士の思案の一端を知る爲に數通の書面を掲げませう。

『拜啓時下初夏之候愈御淸安之條奉恭賀候野生幸に無異乍憚御放念被下度候却說賢嗣大學御卒業被成候由慶賀の至に奉存候豚兒も幸に高等學校卒業致候在京中は每々御提誨を辱う致し御蔭にて今日に至

り候事感謝の至りに不堪候東京之方は失敗致九州之方に入學致申候先日上洛之砌御禮旁御伺申上候處御上京中にて不得拜眉遺憾に奉存候

乍序弟論文審査經過如何に相成居候哉或は故○○(名を秘す)と同運命に在るに非ず哉と存危惧之感有之候御消息御洩し被下候事を得ば幸甚に存候匆々不盡五月初六松山直頓首高瀨道兄尊右』

右の一通は大正拾五年五月六日の書簡であります、又

『拜啓本日は參堂長座失禮仕候久振にて心友に邂逅懇談之機會を得欣悅に存候却說先日御尋申上候儀御返事無之本日も何等御話無之より察するに何等か打明御話難出來事にて有之候半哉桑原兄より承及候へば弟論文之主査變更之事有之貴兄より狩野兄之方へ移り候由同君之弟論文に對する意見抔老兄御聞及も有之候はゞ御洩し被下度希上候審査之事は尤も嚴正公平毫も私情を挾むを許さゞる事なれば可否共に何等不滿を抱くべき筋合の儀に無之候へば何卒右御內報之程奉希上候先は右御願迄如此に御座候乍末筆皆々樣へ宜敷御致聲之程希上候匆々不盡六月八日弟直頓首惺軒老兄侍史』

右の一通は大正十五年六月八日の書簡であります、又次の如く

『貴墨拜誦仕候時下嚴寒之候愈御清祥奉恭賀候其後は打絕御無音に打過申候段御宥し被下度候每々貴意に掛けられ候事深謝之至に不堪候御新宅落成御移居之御慶有之候由奉賀候何れ上洛の節御邪魔仕度存申候先は右謝衷申述度如此に御座候匆々不盡昭和二年一月三拾日松山直頓首高瀨學兄侍史』

右の一通は私が博士から得た最後の書面であつた。上洛云々とあるも遂に御來宅はなかつた、此頃から幾分御病氣であつたと記憶します。

又博士が如何に注意深く懷德堂の講學に氣を配られたかを察するに足る一通があります。

『貴簡拜誦仕候陳は來六日は正午迄御授業有之午後三時過ならでは御來堂難出來御由にて先日御願申上候儀御快諾不被下候得共萬一之場合は時間遲くとも其れにて御願申候事とも可相成と存候へば何卒御準備丈御願申上度是も萬一の場合を考へての事に御坐候間左樣御含置被下度願上候先は右のみ餘は期拜眉申候匆々不盡拾月七日松山直藏頓首高瀨武次郎樣侍史』

此時は大正十五年十月七日であつて、十一月六日の例祭の講演の事であつた、藤井健治郎、狩野直喜服部宇之吉三博士が當日の講師であるのだから普通ならば一人缺けても二人あるからと云ふが、博士は必ず三人と廣告した通の數に合はすと云ふ積で補員を備て置くのであつた、堂務に忠實なりしこと想見すべきでありませう。

博士は加納治五郎氏の講道館と云ふ塾に入りて柔道を稽古された、喜田貞吉君、小田省吾君などは其道の友であつたと常に話されて居た、廣島在職の頃には某禪師に參禪した事もあつた話を聞いた、北條時敬氏には痛く感心して居た、心身の鍛冶には深く意を用ひられ、專攻の宋學研究上よりも充分の修養を積まれたから、全く稜角の取れた圓熟の人であつた、好個の道學者であつた、世の中には溫厚篤

實と云ふ形容詞の當て嵌まる人もあるが博士の如く此の四文字が適合する人は稀であらうと思つた、私には眞に得難い心友であつて、是れから愈益相互に講學の友たらんとする秋に博士に先だゝれたことは誠に悲哀の極であるが、天壽は致方もないから、せめては當年を追想しつゝ講道に勵みませう。大正十四年秋私が支那旅行から歸つて間もなく博士が訪問された時と記憶するが種々の雜談の中に博士は偶然『僕は五年の內に死ぬ』と謂はれた、其時私は之を聞いて變なことを云ふことよ思つたが、人間の壽命は御互に分らぬ、誰が先に死ぬか分るもんではない、君はなか〳〵五年や十年で死ぬものかと云ふて紛らしたことがあつた、博士は冗談を云ふたり、滑稽なことをする人ではなかつた、一言一行が悉く眞面目で、誠實其物であつた、今日から考へると博士の死の豫言が當つたのは身體に何か弱點を痛感して居つたらしい、博士は丈は高い方ではなかつたが、見た所柔道家らしいドッシリした體格で顏色も好く、肥滿して居たから、弱くは見ねなかつたが、廣島で二回も腹部に大手術を受けられた事があつて、自分は普通の身體ではないと平生云はれて居つた、鼻頭の赤かりしは何かの中毒であつたと思ふが、博士は酒は飲まなかつた、長途旅行には堪へられないと思ふて、支那旅行も今にも出掛けたいと云いながら遂に果さなかつた。

欲を云へば限りはないが、博士もせめて、令息堯君が大學卒業まで生て居つたらとも思ふが、堯君は今は福岡大學の法文學部の第二回生で勉强家であるから二年の後には卒業されるし、令姪橋本熄君

も博士の監督薫陶の下に勉學し今は同じく法文學部の第三回生であるから來春は卒業する、又未亡人は廣島で教育家として勤めて居られた人であるから教育上の事は能く知られ、今は福岡の方へ二君と共に移居して二君の世話をして居らるゝから安心である、博士も地下に瞑して可なりと思ふ、是れも亦欲を云ふ樣であるが、論文に對する文學博士の號も夙とに受領すべき實力は充分にあつたが、色々の事情で終焉の前一日に受領さるゝことゝなつた、此の憾は何時までも殘るが、兎に角、學位を得られて以て懷德堂を飾られ、同堂歷代の諸儒と共に永く祀らるゝは亦以て學者の光榮とすべきことであります。

『空堂に經を講する覺悟である』とは博士が廣島から懷德堂へ移る時の語であつた、此の堅き決心で就任し大に盡力されたから、なか〳〵空堂講經どころではない、常に多數の聽講者があつて浪華の人士に多大の益を與へつゝ十有餘年を經過し益隆昌に向ひつゝあるのは博士の力が多に居る、外から見て居ると勤め過ぎる程に勤めて居られた、堂務經營も容易の事ではなかつたが、博士の人格は最も善く懷德堂教授に適合して居つた、温良恭儉讓と云ふ五字は門人が孔夫子を評した語であつて誰でもが此の五字に當ることは出來ない樣にも思ふが、私が博士を見ると五字ながら悉く當て得るやうであります、博士は醇儒であつた、世には博覽强記の人は少くないが、先儒の典型を保つて道を自任する者は近來博士の如きはないであらう、博士は毒氣のない人、機心のない人であつた、道に純白な人であ

つた、一見して君子人たることが分る人であつた、全く德の人で、人に對しては親切を極め、能く學生を愛した、之れに對すれば春風裏に坐するの感があつた。

博士は弟子の提誨には深く意を注がれたから弟子も亦之に信服して居た、中には熱心な勉强者も出た、其の一例として擧げると、懷德堂の開堂以來一時間も缺席せずに聽講する女弟子の今川女史と云ふのがある、熱心に研究するから學力も漸次增進し、白文の漢文の本も容易に讀み得る樣になつて、女史は十三經註疏を支那から買ひ求めて片端から讀破して居り、又種々の講義も聽て知識も豐かになつたらしい、博士が同堂の書籍整理にも助手として分類目錄を他の男子の弟子と共に骨折つて作つた、女史は家庭が天理敎の熱心な信者で布敎に從事して居るのみならず、本人も一生獨身生活をして敎祖の志を繼ぎ廣く布敎したいと曰つて居る、博士は此女史の結婚期が遲くなると云ふて心配し私にも屢話があつて、大學出の支那に關係ある學問をする人を配偶に求めんとし、某氏に白羽の矢を向けんと欲して周旋を賴まれたこともあつたけれども、私は女史本人が意志がないとなれば勸めて結婚させる事は困難であらうから結婚問題は止めて女史が讀みたいだけ讀ましたら宜からう、其內に女史も三十歲を越ゑると漸次人生獨身生活の寂寥を感じて自分から配偶を望むやうになるであらうと云ふた、大正十三年の秋宇野哲人君が懷德堂の講演に來た時にも女史の話が出て、宇野君にも一人の熱心な漢學研究の女弟子があつて、結婚を勸めても聞き入れず、只進で讀書に耽て東大の聽講生にもなつて居る、

今川女史と彼女とは若し怠らなければ東西相對して女流漢學者になるであらうと話した、今私が之を書くのは單に女史一人の爲めではない、博士の薫陶を受けた同堂の研究者は何卒遺志を奉して熱心に勉學して、博士に報謝せられんことを望むからであります。（昭和二年九月上旬記す）

故松山直藏君を憶ふ

堀　維　孝

明治三十五年廣島高等師範が創設せられて、北條校長始め教官事務員合せて七八名が文部省内の一室で創立事務を執つて居た七月の或日、圖漢書買入の爲某書店に校長の御伴をした事がある。其時校長は半紙を竪折にして横に奇麗な細楷で漢籍の名を記してある幾葉かの紙を示され、是れは授業開始迄に廣島に來任すべき漢文教官の提出したものだと告げられたが、誰といふことは御尋しなかつた。

八月半頃廣島に移つて間も無く其人も來任せられた。それが松山君であつた。爾來予が大正五年學習院に轉任する迄約十五年間、公には同一學部に勤務して關係の密接な學科を分擔し、始終教官室を共にし、幾回か講習を共にし、私には時々の訪問往來の外、或は他の同志と共に書物を會讀し、或は